平塚明子（らいてう）

長谷川時雨

青空文庫

一

らいてうさま、

このほどお体は如何で御座いますか。爽やかな朝風に吹かれるといかにもすがすがしくて、今日こそ、何もかもしてしまおうと、日頃のおこたりを責められながら、私は、貧乏な財袋よりもなお乏しい頭の濫費をしつつ無為な日を送っております。

御あたりはお静かでございますか。田舎での御生活は、どこやら不如意なようでいて、充実されたものであろうと、お羨しくぞんじます。あなたのお体にもよし、御家庭にもしみじみとした味の出た事と存じます。お子さまがたは、御自分たちのお母さまとして、日夜お傍に親しむことのお出来になるのを、どんなに現わし得ない感謝をもって、およろこびなされている事かと、あたくしでさえ嬉しい心地がいたします。そして風物は悠々として、あなたの御健康を甦えらせていることとぞんじます。

二

らいてうさま、

那須野を吹く風は、どんな色でございましょう。玉藻の前の伝説などからは紫っぽい暗示をうけますが、わたくしの知る那須野の野の風は白うございます。冬など、ふと灰色がかるようにも感じられますが、わたくしには何となく白いように思われます。その白さも、薔薇の白ではなくて、白夜、白雨といった感じ、夏らしい清新の感がともなっております。

わたくしは那須野をよく知りません。奥州へ行ったおり、時折通りすぎた汽車の窓からあかず眺めて通ったところで御座います。あの広々した野を見ると、せせこましい、感情にのみ囚われている自分から解きほどかれて、自由な、伸々した、空飛ぶ鳥のような勇躍をおぼえました。わたくしは山は眺めるのを好みます。海の眺めも好きです。が、野の景色ほどしみじみと好きなものはございません。あかず行く雲のはてを眺め、野川の細流のむせぶ音を聞き、すこしばかりの森や林に、風の叫びをしり、草の戦ぎに、時の動きゆく姿を見ることが望みでございます。むさしのに生れて、むさしのを知らぬあこがれが、わたくしの血の底を流れているのでございましょう。

いま、わたくしの目の前、小さな窓も青葉で一ぱいで御座います。思いは遠く走って、那須野の、一望に青んだ畑や、目路のはての、村落をかこむ森の色を思いうかべます。御住居は、夏の風が青く吹き通していることと思います。白い細かい花がこぼれておりましょう。うつ木、こてまり、もち、野茨――栗の葉も白い葉裏をひるがえしておりましょう。塩原へ行く道を通っただけの記憶でも、那須は栗の沢山あるところだと思いました。小さな、一尺二、三寸の木の丈で、ほんの芽生えなのに青い栗毬をつけていたことを思い出します。

昨夜は、もう入梅であろうに十五日の月影が、まどかに、白々と澄んでおりました。夏の月影の親しみぶかさ――そんなことを思いながら眺めておりました。そちらの月の夜は、夜鳥もさぞ鳴きすぎることでございましょう。月明に、夜空に流れる雲のたたずまい

もさぞ眺められることで御座いましょう。そして静寂な中に、ともしびをかこんで、お子様がたのおだやかな寝息に頭をまわしながら、静かに、あなたがたは何をお読みになっていらっしゃるか、何をお思いになってお出であろうか、または、何についてお談話をなされてであったろうかと、ふと何ともいえぬ懐しみが湧き上りました。

らいてうさま、あなたのお健康は、都門を離れたお住居を、よぎなくしたでございましょうが、激しい御理想に対してその欲求が、時折何ものも焼尽す火のように燃え上るおりがございましょう。けれどもまた、長い御一生に——あなたばかりでなく、お子様がたにも——おだやかな、滋味のしたたるような今の御生活が、しみじみと思い出されるおりがあろうと思いますと、只今の楽しいお団欒が、尽きない尽きない、幸福の泉の壺であるようにと祈られます。

三

らいてうさま、

時折来訪される人で、あなたをよく知らないで嫌いだといって、あなたの事といえばよく聞きもしないで悪くキメつけるお爺さんが御座います。紅蓮洞という人です。その実その人は、決してあなたが嫌いなのではないので御座います。その人として嫌いなはずがないので御座います。奇人ゆえ、ふとした事から嫌いにしてしまうと、もう取返しがつかなくなって、しつこいほど意地わるく悪口をするので御座います。けれどわたくしはその人がひそかにあなたには敬意をもっていることを知っています。奇人にはちがいありませんが、洒脱、飄逸なところのない今様仙人ゆえ、讃美する的が外れて、妙に反ぐれてしまったのだと思います。そのくせその人が好意を示しているもので、あんまり感心した女はないのです。そして好意を持ちながら侮蔑しきっているのです。

それとは事かわりますが、世の中には、誉めたいのだが、他人があんまり感心するから嫌だといったふうな旋毛曲りがかなりにあります。口に新時代の女性を謳歌しながら、趣味としては、義太夫節などにある、身を売って夫を養う妻を理想として矛盾を感じない男もあります。

近代生活思潮に刺戟をうけながらも、その不安をごまかして、与えられる物質だけに満足して、倦うい日々をおくるのを、高等な生活のように思いこんだ婦人たちは、あなたが新しい女と目されて、社会の耳目を※だたせたおりに——無気力無抵抗につくりあげられた因習の殻を切り裂いて、多くの女性を桎梏の檻から引出そうとしたけなげなあなたを、男が悪口する以上な憎悪の目をもって眺めさげすみました。知識階級にある男たちまでが好い気になってあなたの恋愛——他人に何らの容喙をも許されないことにまで立入って、はずかしげもなくあげつらい得々としていました。しかしそれは日本人の癖で、ちょっと他の者が答えかねる事を——賤しさを、口にするのが、妙な風に感心させようとする手段で、他をはずかしめると共に自らを低くする事に平気なのです。無神経なのです。それをまた得々として雷同するものが多いのは情ないことです。

あなたはそうした意味であらゆる人の、口の端におかかりでした。けれど、皆んな、やっぱりその内心は、今様仙人とおなじ型だったのです。

あなたはほんとによくお働きでした。あれではとてもたまりませ

ん、『青鞜』時代――「新婦人協会」時代――その間に御自分だけの生活としても、かなり複雑な――あなたの恋愛、母親となったあなた、それは一つひとつにはなすことの出来ない、あなたの思想と密接な関係のあったものとはいえ、時代にさきだって事にあたったあなたには、どの一つでも勇気と自信のいることでした。あなたのなさった事がみんな無意味でなく、空論ではありませんでした。

もともと仙人とは空気を食べてたふうのものでしょうから、今様仙人が空論を吐くのは、ゆるすとして、その他の人が口だけで、とやかく蔑すむのを憎みます。このごろ、あなたが衝にあたってお出でないという事が、新婦人協会の内部もめをおこしたというのを聞き、今更と思う思いがいたしました。

四

らいてうさま、

昨年、一昨年、一般社会に普選ということが問題とされ喧びすしかったおり、あなたもまた、婦人参政権を求め、婦人もまた一個の人間としての扱いを要求し、めざましい御活動で、各地を遊歴なさいましたその折にも、例の京童は、あなたのあれが商売だともうしました。商売とは、昔者の言葉でいえば、世渡りの綱で、心にもない事も言って生活の代を得る――というふうに、そうした言葉で、その折にもそうした意味に用いられました。

わたくしはかなりの憤おりを感じました。親譲りの財産でもないかぎり、また有あまった収入の道があって体が暇な人がするお道楽なら知らず、食べないで働けるものではありません。昔の高僧とよばれる人でさえ、人間を救いながら喜捨はうけていました。与えられた食物を糧にして救いました。それがすこしも賤しい事でも何でもありません、立派な生活です。一本の敷島を煙にしてもそれだけの失費があり、自分の足で歩くのだといばっても、跣足ではあるけない世の中に衣食するものが、得るものがなくてなんで過してゆけましょう。ましてその人は、洋画家の収入の僅少なのを知っているのです。それに幼少な子たちさえおありになるあなたの御家庭が、なかなか費えのある事を思わず、またそうした苦悩をしのんでも、志した道に精進して、婦人の覚醒に力をつくされる、社会的な、広義な愛を――新人の味わう悲痛を知ろうとしないのに、憎らしささえ覚えました。

らいてうさま。あなたは、言うにいえない、人知れぬ苦い涙を、幾度お味いなさいましたろうとおいとしく思います。あなたは、優しい夫君、いとしいお子たちに取りまかれて、静かに出来るだけの日を静養なさいまし。そして心身ともに以前に倍しておすこやかになり、ともすれば懶惰に、億劫になりがちなわたしたちのために、発奮させる原素となって下さいまし。

五

らいてうさま、

わたくしはもう「煤烟」を読んだおりの感想を思い出すことが出来ません。たしか寒い、雪の中を、あなたが気強さを守り通して、一人で山の方へ立っておしまいなさったということをおぼえておるだけです。そのうち、「煤烟」の作者を、ずっと後に見かけた事が

あります。大柄な、肥った、近眼鏡をかけた色の白い、髪を短くかった方でした。以前からお連添いになっている藤間勘次さんが、藤間静枝の「藤蔭会」の第一回に出られた時のことで、日本橋の常盤倶楽部で御座いました。その折にわたくしは何故となく「煤烟」は男の方から見ただけで書いたものだという気持がしました。その後、『青鞜』から尾竹紅吉さんの『サフラン』が生れ、『青鞜』が伊藤野枝さんのお手に移ってやめられてから、『青鞜』の第二世という『ビアトリス』が新に生れ、そしてその同人山田田鶴子さんに時折お目にかかる機会が来たときに、山田さんから伺ったはなしでは「煤烟」の作者は、幾度「煤烟」を繰かえそうとなすっているかと、ほほえまれるので御座いました。

あの事件――あなたのお名がわたくしにも親しみ深くなったおり、あなたの処女作でおありだろうと思う、たしか二場ばかりの脚本を載せた小さな雑誌の寄贈をうけたことがありましたが、「煤烟」の中のあなたらしい女性をとりあつかった題材で、脚本そのものは、平ったくもうせば、よかったとはもうせませんが、わたくしは大変興味をもって読みました。そのまたあなたが禅をお学びだということもそのうち承わりました。

いつぞや有楽座で、チェホフの「叔父ワーニャ」を素人の劇団の方たちが演じたおり、奥村さんがギターを弾く役をなさった事がありました。あの節お招きを頂きながら田端のアトリエへうかがわなかったのを、いまでも大層残念に思っております。お宅が芝居のおけいこばになっているから見に来てくれるようにとお言づてのあったおり、わたくしは何ともいえぬ和気藹々としたものを感じました。わたくしもあなたがたを取巻く劇中の一人のはやくになって、田端の画室の仮けいこ場へ登場して、御家庭にも親しんでみたいと思っておりましたが、なかなか家を出ないのがわたくしの癖で、そうしなければと思っているうちが、何んでも一番心持が緊張している時で、さあという段になると気が重くなるのがわたくしの悪い習慣なのでございます。

あなたをぜひ美人伝に入れなくてはならない方だと、わたくしがいったのを、人づてにお聞きになって「どうぞお書き下さい。だが、どんな風にお書きになるでしょう」と仰しゃったというお言づてを伺ったのも、もう三年も前になります。どんなふうにといって、あなたは単に美人伝ばかりの人ではありませんから、わたくしは、あっさりと、あなたのお名を加えて自分の満足だけに致すのです。貴女の伝記は、思想家として――近代女性の母としてあるべきです。

あなたというお方は、気持の優しい方だと思います。知らない方は、あなたをまるで違ったふうに思っているでしょうと思います。女丈夫だから、若く、ねんごろにつかえる夫を持ったなどと推測にすぎることを言って平気なものもありますが、それは大変あやまった事で、あなたほどの方が夫から敬されたのはあたり前です。それ以上の親しみと愛が、そんな事を包んでしまうのを知らないのです。妻というものは台所の俎板と同様、または雑巾ぐらいに見てよいものだといって憚らないものがあることゆえ、妻の偉さを知っているものを白眼で見て、羨ましさから起る嫉妬にしか過ぎません。なんであなたほどのかたが、妻におもねり、機嫌ばかり取っているような、そんな男を男と見ましょうか、伴侶として選みましょうか。見せかけだけでしか標準をさだめ得ない、世の中の軽薄さを思わせられます。

田村俊子さんがお書になった日記の中で、読んだことがあります。みじかい文のなかに、あなたという方がくっきりと浮いて見えたのをおぼえております。見つけだしましたから書いて見ましょう。

十一月廿四日、夕方平塚さんが見える。今日は黒い眼鏡がないので顔の上から受ける感じが明るい。話をしている間に深味のある張をもった眼が幾度も涙でいっぱいになる。この人を見ると、身体じゅうが熱に燃えている、手をふれたら焦げただらされそうな感じがするでしょう、とある人のいった事を思いだす。厚い口尻に深い窪みを刻みつけて、真っ白な象牙のような腕を袖口から出しながら、手を顎のあたりまで持っていって笑うとき、ちょっと引き入れられる。私はこの人の声も好きだ。

わたくしはあなたのお顔を、天平時代の豊頬な、輪廓のただしい美に、近代的知識と、情熱に輝き燃る瞳を入れたようだとつねにもうしておりました。

らいてうさま、

あなたが濡れそぼちて、音楽会の切符を持ち廻られたり、劇場と特約した切符を売ったり、なれない場処で、芝居の座席の割りつけに苦心してお出でなさるのを見るのはお気の毒のようにさえ思いおりました。くれぐれも只今の御生活を、お身体の滋養となさって、御休養を切に祈ります。これからの激しい世波を乗り越すには、気力も、体力も、智力の下に見る事は出来まいと思います。御自愛なさいまし、らいてうさま。

――大正十二年七月――

附記　明治四十四年十月、平塚らいてう（明子）さんによって『青鞜』が生れたのは、劃期的な――女性覚醒の黎明の暁鐘であった。このブリュー・ストッキングを標榜した新人の一団は、女性擡頭の導火線となったのだった。

『青鞜』創刊の辞に、

原始、女性は太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

さてここに『青鞜』は初声を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によって始めて出来た『青鞜』は初声を上げた。

女性のなすことは今はただ嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知っている、嘲りの下に隠れた或ものを。

そして私は恐れない。

（中略）

――私どもは隠されたる我が太陽を今や取戻さねばならぬ。

わたくしは新らしい女である。わたくしは太陽であると、らいてうさんは叫んだ。

「新らしい女」という名が、讃美、感嘆、中傷、侮辱、揶揄と入り交って、最初は青鞜社員から社友に、それからは一般の進歩的婦人の上にふりそそがれた。

『青鞜』は最初、社会的に全然地位も自由ももたない婦人たちが、文芸を通じて心の世界に自由を求め、そこに自分の生命を見出そうと、中野初子（日本女子大学国文科出身）木内錠子

（同）保持研子（同）物集和子（夏目漱石門人・物集博士令嬢）平塚明子（日本女子大学家政科出身）の五人の発起だった。

この人たちの勇気と決心は、婦人解放運動の炬火となったのだ。

『青鞜』の編輯は、最終のころは、伊藤野枝さんにかわっていた。野枝さんは後に大杉栄氏夫人となって、震災のおり×されてしまった。

この附記は、らいてうさんの出発点をよく知らぬ人のために、蛇足かもしれぬが記しておく。

青空文庫情報

底本：「新編　近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店
　1985（昭和60）年11月18日第1刷発行
　1993（平成5）年8月18日第4刷発行
底本の親本：「近代美人伝」サイレン社
　1936（昭和11）年2月発行
初出：「婦人画報」
　1922（大正11）年9月
※編集部の付けた註は除きました。
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2007年4月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

平塚明子（らいてう）

長谷川時雨

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/